

自尊感情を高め、信頼と『つながり』を深めるために ～ルールづくりを通して生徒自身が高まる活動～

稲美町立稲美北中学校
主幹教諭 松尾 恵宏

1 はじめに

本校は、東播地域ののどかな田園地帯に位置し、創立 37 年目を迎えている。校区に 2 つの小学校があり、全校生 429 名 16 学級の中規模校である。

数年前までは、生活指導上の問題が多発し、授業が困難なクラスもあったが、現在では、一部に課題は残るものの、生徒の授業態度は概ね良好であり、行事や部活動などにも積極的に取り組み、明るく元気に学校生活を送っている。

現在、本校の抱える課題は次の 4 つである。

- ①家庭の教育力が二分化していることによって生じている学力格差の拡大への対応
- ②自尊感情、自己肯定感の高まりが不十分な生徒の増加
- ③社会性が未発達な生徒や精神的なたくましさを欠いた生徒の増加
- ④不登校傾向の生徒の増加

これらの課題の解決に向けて、本校では当面の取組目標を次のように設定している。

- ①様々な教育活動の中で、生徒に『成就感』『達成感』を感じさせる。

生活面に課題のある生徒も多く、それらの生徒は全てに意欲を失いかけている傾向が見られる。個々に目標を明確に持たせ、授業を中心に、行事や生徒会活動、部活動等でも自尊感情・自己肯定感を育てる取組をすすめる。

- ②生徒理解に基づく生活指導の充実を図る。

そのために、全教職員が情報交換・連携を大切にし、生徒との人間関係づくりをすすめる。

- ③保護者や地域との連携をさらに深める。

学校からの情報発信をきめ細かく行い、課題の共有を図るとともに、コミュニティ・スクールとしての役割を担っていく。

2 生徒自身によるルールづくり、豊かな自主活動の創造を目指して

(1) SNS・スマホのルールづくり (2015 年)

中学生の間でもスマホなどを利用して SNS を使用し、ネット上のトラブルが増加傾向にある時期に、実態を把握するためにアンケート調査を実施した。その結果、SNS を利用している生徒の割合が全体の 60% を超える状況にあることがわかった。友だちとの連絡に便利だというメリットを感じている一方で、「やめるタイミングが分からない」「テスト前なのにダラダラしてしまう」というデメリットを感じている意見も多く見られた。アンケート結果から生徒も問題意識を持ち、6 月の生徒総会では SNS の使い方が議題となった。

①生徒会執行部によるルールづくり

生徒総会での討議を経て、夏休みには PTA と座談会を開き、SNS ルールを作ることを確認した。2 学期に入り、生徒会執行部 15 人に加え、各学年の生徒会担当教諭、生活指導教諭が参加し、SNS ルールの草案づくりをスタートさせた。「夜 9 時以降は、わ

たしたちはメールやラインを送りません！返信しません！」を基本として話し合いをすすめ、他の家に連絡するには夜9時以前がいいだろうという意見が取り入れられた。その後、全校委員会で提案し、クラス討議を経て、12月の生徒総会でSNSルールの承認を得ることとなった。

②ルールの周知と啓発活動

家庭の協力を得るために、校内掲示をはじめ、生徒会が発行する生徒会新聞や行事の冊子などでSNSルートを積極的に発信するとともに、学校行事に来校される方々の目に触れやすいように横断幕やのぼりを作成した。また、このルールづくりのことが『月刊 兵庫教育』（2016.6 No.784）に取り上げられたり、他校のルールづくりに協力したりすることもできた。

写真① SNSルールと生徒会執行部



③現状の把握、定期的なアンケート調査

この取組が一時的とならないように、定期的にアンケート調査をし、全校生の実態を把握し、フィードバックすることを大切にしている。最近の保護者アンケートでは、「家庭でSNSやスマホのルールがある」と回答した家庭は70%近くになった。これは、定期的におこなっている生徒アンケートで「SNSルールを守っている」と回答した生徒の割合とほぼ同じであった。SNSルールを守ろうという啓発活動が、家庭生活でもマナーを守って活用することにつながっていると考えている。このルールの策定以降も、メールやメッセージを送らない時刻としている「夜9時」を変更するか毎年検討しているが、「自分の家にも9時というルールがあり守っている」という意見を尊重している。

(2) ノーチャイム制の導入（2016年）

学校生活が落ち着きはじめた要因である「黙想」「班活動」をもとに、新たに取り組んだことが「ノーチャイム制」の導入である。

①ノーチャイム制の是非

生徒会長が執行部内で提案するが、反対意見の方が多く、「学校からチャイムがなくなるなんて考えられない」とか「まだ時期が早いのでは？」と心配する声も多かった。しかし、授業2分前着席を学級委員が「黙想」として呼びかけており、チャイム前には授業が始まっている状況に「ノーチャイムでも問題ない」と考える生徒もいた。

②ノーチャイム制の議論・試行・整備

6月の生徒総会で「ノーチャイム制」が初めて提案され、1学期中に1週間試行することになった。チャイムがないことで授業が遅れたり、長引いたりすることはなく、試行後のアンケート調査では「新たに時計を設置する必要な場所がある」、「すべてのチャイムをなくすのではなく、必要なチャイムは残す」などの意見があり、本格実施に向けて動き出した。夏休みにPTAとの座談会を行い、この取組の主旨を説明して時計の寄付をお願いした。

③ノーチャイム制がメディアで紹介

12月の生徒総会までに環境面を整えようと念入りに準備をした。10月末には再度試行期間を設けた。2度の準備期間を設けたことで、全校生の意識が高まり、生徒総会で承認を得て実施した。その後「ノーチャイム制」が新聞やテレビ（2017年1月30日：神戸新聞、2月9日：毎日放送「ちんぷいぷい」内）で大きく紹介され、生徒自身の取組が地域でも話題となった。自分たちの学校が注目されていると感じることで、「ノーチャイム制」の活動に一層誇りをもって取り組むようになった。取材中、生徒写真② 2017年1月30日：神戸新聞より



私たちは「ノーチャイムにすると決まった時、もう少し先生たちが手伝ってくれるのかと思っていただけ、ほとんど自分たちで考えたり進めたりしたので、とても大変だった。自分たちでノーチャイム制にしたという誇りはある。」と語った。また、「ノーチャイムが始まってから、クラスのいろんなところから『早よ座りよ』の声が聞こえます。ノーチャイム制がお互いのコミュニケーションを高めています。」とノーチャイム制の効果を挙げていた。生徒副会長は「このノーチャイムは在校生のことを考えて作ったものですが、これから先、ぼくたちの思いを受け継ぎ、5年先、10年先も自分たちで声がかげられるようなノーチャイムを残してほしい。」と未来のことにも言及していた。

(3) INAKITA ISMをつくる (2017年)

2017年の生徒会執行部は、全校生が自分自身を大切にしながら学校生活を送ってほしいと願い、学校生活のきまりを生徒の立場から見直そうと活動を始めた。ISMとは「主義」「主張」という意味で捉えられることもあるが、最近では「流儀」や「やり方」という意味で捉えられることも多い。北中生としてあるべき姿を明確にするために「学習や日常の約束事」を考えた。

生徒会執行部では、まず、学校生活で自分たちが大切にしたいことを20個近い項目で考え始め、全校委員会やクラス討議での意見交換を経て、基本となる3つにまとめた。

- ①元気に登校する
- ②学校での学びを深める
- ③笑顔で下校する

写真③ INAKITA ISM



学校生活では、さまざまな立場の人がいることを理解し、「登下校」「人間関係」「学校で」「家庭で」の4項目の内容を決定し、それぞれ呼びかける表現を多く使うことにした。唯一、否定の表現にしたのは「自分や人を傷つけることは絶対にしない」である。そこには、いじめをゆるさない生徒たちの強い思いが反映されている。1か月以上かけて言葉や表現を吟味し、ようやく完成し、執行部の任期が終了する12月の生徒総会で承認され、全校生に周知されたものが写真③である。

また、この取組を県議会議員と座談会で発表し、期待をもって激励していただいたことは生徒たちの大きな自信となった。

(4) 地域活動へ参加する(2018年)

2018年は本校がコミュニティ・スクールになった年でもある。学校生活では、行事や参観で来校される方々にも褒めていただくことが多くなってきた。地域の青少年健全育成協議会や民生委員の方との会合でも本校の取組を発表する場が増え、教職員や生徒がこれまで以上に地域とのつながりを意識して活動するようになった。生徒会が「ボラン

写真④ 3年生の地域清掃



ティアスピリッツ」という活動を提案したのは自然の流れであり、地域の小学校の夏祭りの運営に協力したり、地域行事の翌日には早朝から生徒がボランティアで清掃活動に参加したりするようになった。3年生は12月に地域清掃活動として通学路の清掃を行い、冬季休業中には部活動単位で地域の公園などを清掃している。参加した生徒は「地域に貢献するって気持ちがいい」と笑顔で話してくれた。

写真⑤ PTA 座談会

3 おわりに

生徒会の『SNS・スマホのルール』『ノーチャイム制』の取組は、生徒の自主自立を促すとともに、ルールづくりを通して生徒自らの生活を見直し、互いに尊重し合うことにもつながっている。生徒会の取組を支えることで、教職員の生徒理解がさらに深まり、生徒との一体感の醸成にもつながっている。これらの活動を今後も自治的にすすめることが重要である。また、『INAKITA ISM』の取組を通して、学校全体の指導体制にも変更を加えてきた。生徒自身が作った『INAKITA ISM』は、本校の生徒指導基準になっており、生徒と教師が同じ方向を向いて学校生活を送ることができている。



今、本校は地域とともにある中学校を目指して「自分のこと」「仲間のこと」「家族や地域のこと」を大切にしながら学びを深める活動を行っている。この取組が教育活動の基盤となり、今後も改善しながら引き継がれていくよう学校全体で取組をすすめていきたい。